2017 年 10 月 25 日

レジャー白書短信　第 11 号

スノースポーツ人口は 530 万人、スキー派が減少

～重複を考慮したスキー、スノーボードの参加実態～

公益財団法人　日本生産性本部

公益財団法人日本生産性本部 余暇創研は、このほど、「スノースポーツ」（「スキー」と「スノーボード」）に関する分析結果をまとめた。これまでレジャー白書では両種目の参加実態を発表してきたが、同じ回答者が両方参加している場合があり、重複を考慮した「スノースポーツ」の参加実態は明らかにしてこなかった。本短信は重複を除外した参加率、参加人口、希望率や潜在需要とその推移について分析を試みたものである。

参加人口は 530 万人、50 万人はスキーもスノボも（p2 参照）

2016 年における「スノースポーツ」（「スキー」と「スノーボード」の両方またはどちらか一方に参加）の参加率は 5.3%、参加人口にすると 530 万人となり、2 種目両方に参加している人の割合は 0.5%、参加人口は 50 万人となった。「スキー派（スキーだけ参加）」「両方派（両方参加）」「スノボ派（スノーボードだけ参加）」に分けると、2016 年は「スキー派」が「スノボ派」を上回ったが、「スノボ派」の参加率は前年比横這いなのに対し、「スキー派」の参加率は低下した。

スキー派は 10 代と高年層、スノボ派は 20～30 代で多数（p3 参照）

年代別にみると 2016 年に「スノースポーツ」の参加率が最も高いのは 20 代で、次いで 10 代、40 代、70 代の順となっている。20 代と 30 代では「スノボ派」のほうが「スキー派」より参加率が高く、10 代と 40～70 代では「スキー派」のほうが高かった。20 代の「スノースポーツ」参加者のうち 8 割は「スノボ派」または「両方派」である。2010 年、2013 年と比較すると、10～40 代では「スノースポーツ」の参加率は低下しているが、70 代は上昇する年もみられる。

10 代はスキー、スノボ「両方希望派」が多数（p4 参照）

「スノースポーツ」の希望率（将来やってみたい、あるいは今後も続けたい人の割合）は2016年には10.5%となった。「スノボ希望派」（「スノーボード」だけ希望）の割合は2012年から大きな変化はないが、「スキー希望派」（「スキー」だけ希望）の割合は2012年に比べて2.6ポイント低下した。10代は「両方希望派」の割合が高かった。潜在需要は10代が最大で、60代まではプラスだったが、70代ではマイナスとなっている。中年層は参加率が低いものの潜在需要があり、今後の動向が注目される。

＜余暇活動調査の仕様＞　■調査方法　:インターネット調査　■調査対象　:全国 15 歳～79 歳男女
■有効回収数: 3,328（人）　■調査時期　:2017 年 1 月

【お問合せ先】　公益財団法人日本生産性本部　余暇創研　（担当）志村、高橋

Tel：03-3409-1125／Fax：03-3409-1187／Mail：yoka@jpc-net.jp

1.スノースポーツの参加率、参加人口の推移

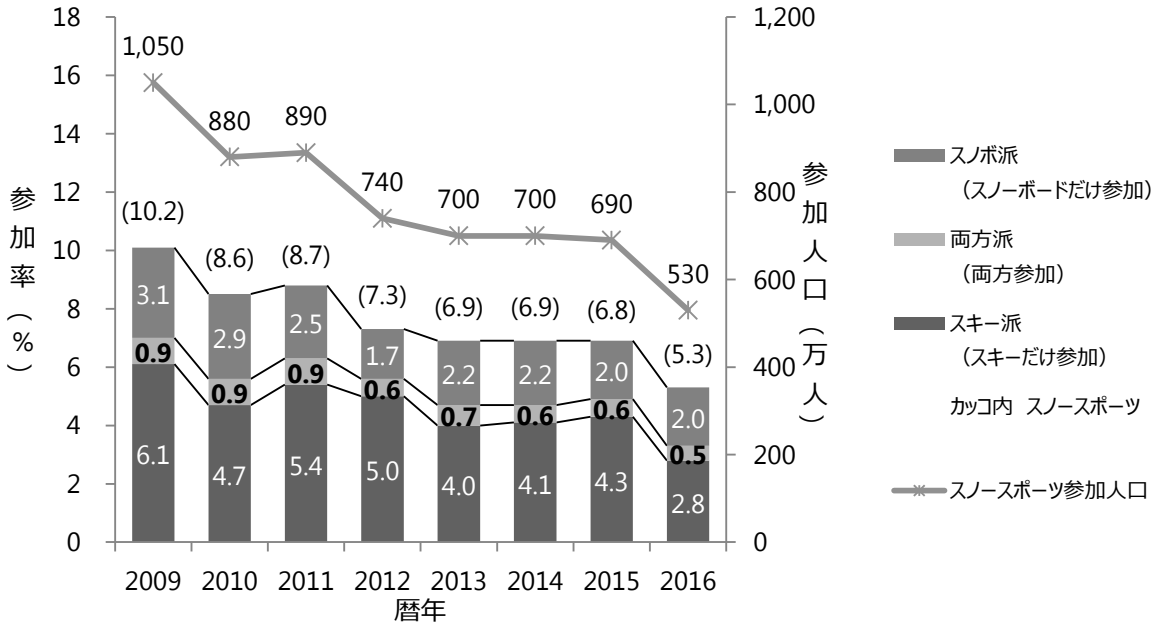
参加人口は 530 万人、50 万人はスキーもスノボも

「スキー」と「スノーボード」の参加実態はこれまでもレジャー白書で明らかにしてきたが、スノーシーズンのスポーツとして参加率を合計してしまうと両方参加する人をダブルカウントすることが懸念された。そこで「スキー」だけ参加している割合（「スキー派」）、両方参加している割合（「両方派」）、「スノーボード」だけ参加している割合（「スノボ派」）に分けて過去 8 年にわたり調べ直した（図表 1）。2016 年における「両方派」の割合は 0.5%、参加人口は 50 万人となり、純計（両方またはどちらか一方に参加）の参加率は 5.3%、参加人口は 530 万人となった（以下、この純計を「スノースポーツ」の参加率、参加人口と呼ぶ）。参加率 5.3%という数値は、「キャッチボール、野球」の 5.8%、「テニス」の 5.7%、「ゴルフ（コース）」の 5.5%をやや下回り、「サッカー」の 4.8%、「バレーボール」の 4.6%を上回るものである。

推移をみると、「スノースポーツ」参加率は 2013 年から 3 年連続で 6.8～6.9%の水準を維持していたが、2016 年は 5.3%と落ち込んだ。内訳をみると、「スノボ派」の割合は 2012 年まで低下傾向にあったが、2013 年に前年より上昇し、それ以降 2.0～2.2%を維持している。「スキー派」の割合は、2013 年と 2016 年に大きく低下し、とくに 2016 年は前年に比べ 1.5 ポイントの落ち込みとなった。

2016 年のスノースポーツ参加人口における「スキー派」「両方派」「スノボ派」の構成比はおおよそ 5：1：4 となっており、「両方派」の割合はどの年も 1 割前後となっている。

図表 1　スノースポーツの参加率と参加人口



（注 1）参加率は四捨五入しているため、内訳の和が合計と等しくならない場合がある。
（注 2）スノースポーツ参加人口は、各年版のレジャー白書の推計で使用した 15～79 歳の総人口を参加率に掛け合わせて得られた数値である。

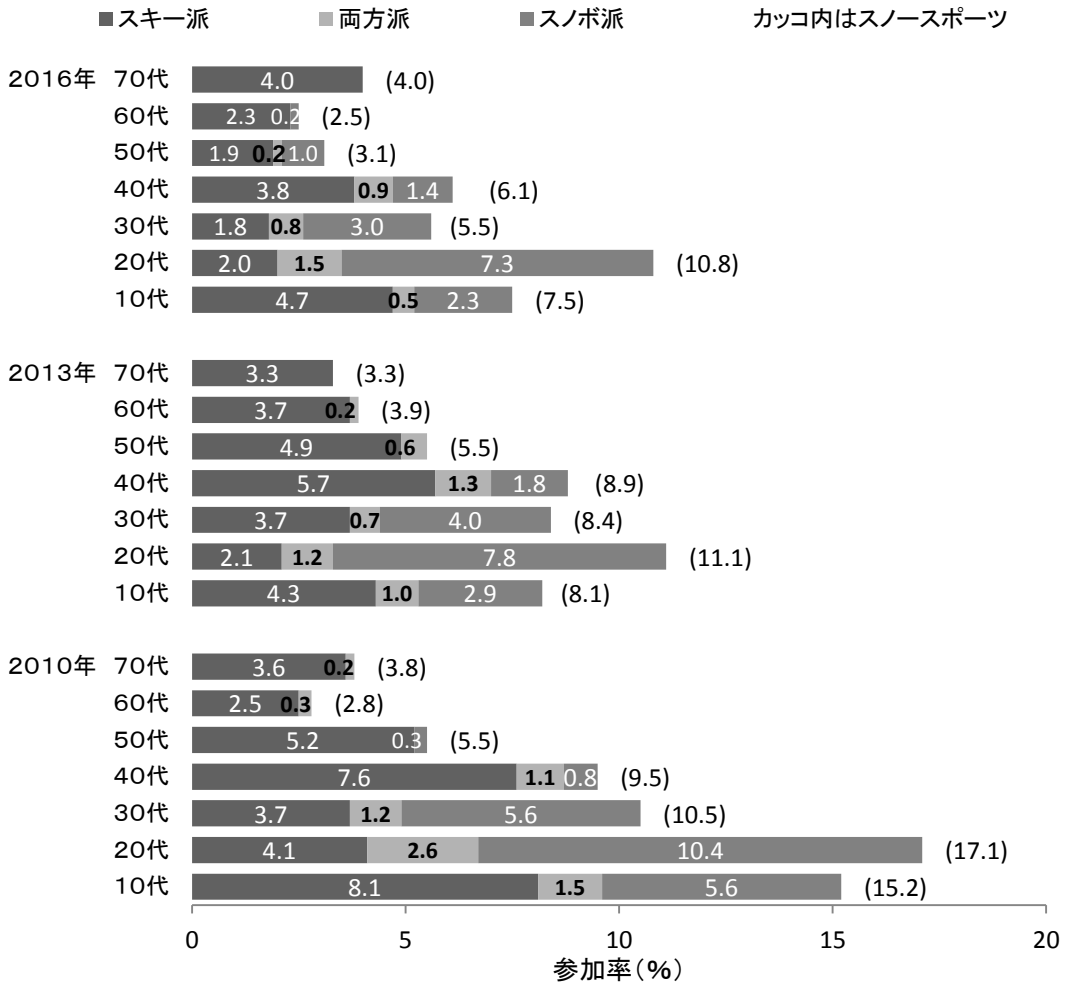
2.スノースポーツの年代別参加率の推移
スキー派は 10 代と高年層、スノボ派は 20～30 代で多数

年代別にみると 2016 年に「スノースポーツ」の参加率が最も高かったのは 20 代で、次いで 10 代、40 代、70 代の順となっている。20 代と 30 代では「スノボ派」のほうが「スキー派」より多く、10 代と 40～70 代では「スキー派」のほうが多かった。20 代の「スノースポーツ」参加者のうち 8 割は「スノーボード」に参加しており、7 割は「スノーボード」だけの参加者である。一方で 70 代は「スノーボード」参加率はゼロで全員が「スキー」参加者だった。

2010 年、2013 年、2016 年の推移をみると、「スノースポーツ」参加率は 10～40 代では年々下がる傾向があるが、50～70 代では横這いまたは上昇する年もあった。どの年も 20 代と 30 代、40 代と 50 代の年代間ギャップが目立っている。高年層では 70 代が 60 代を上回る年があった。

現在「スノボ派」は 20 代と 30 代で多いが、40 代以上でも増えていくのか、また 70 代の「スノースポーツ」人気は続くのか、30 代や 50 代のギャップは縮まるのかが今後注目される。

図表 2　スノースポーツの年代別参加率の推移



（注 1）　年代別のそれぞれの集団における参加率であり、合計しても 100%にはならない。

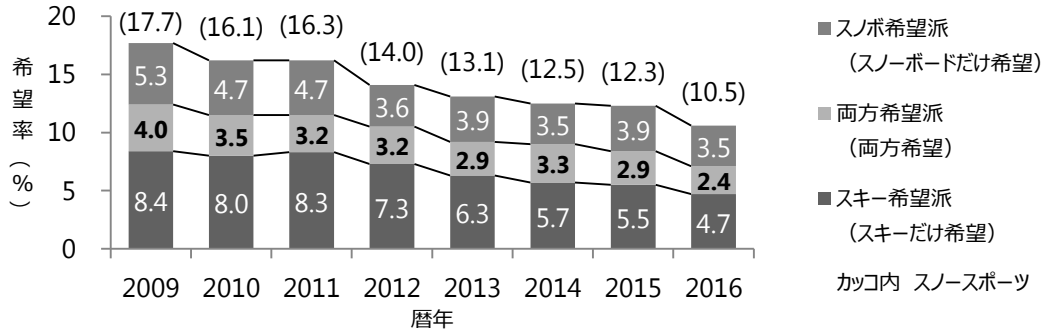
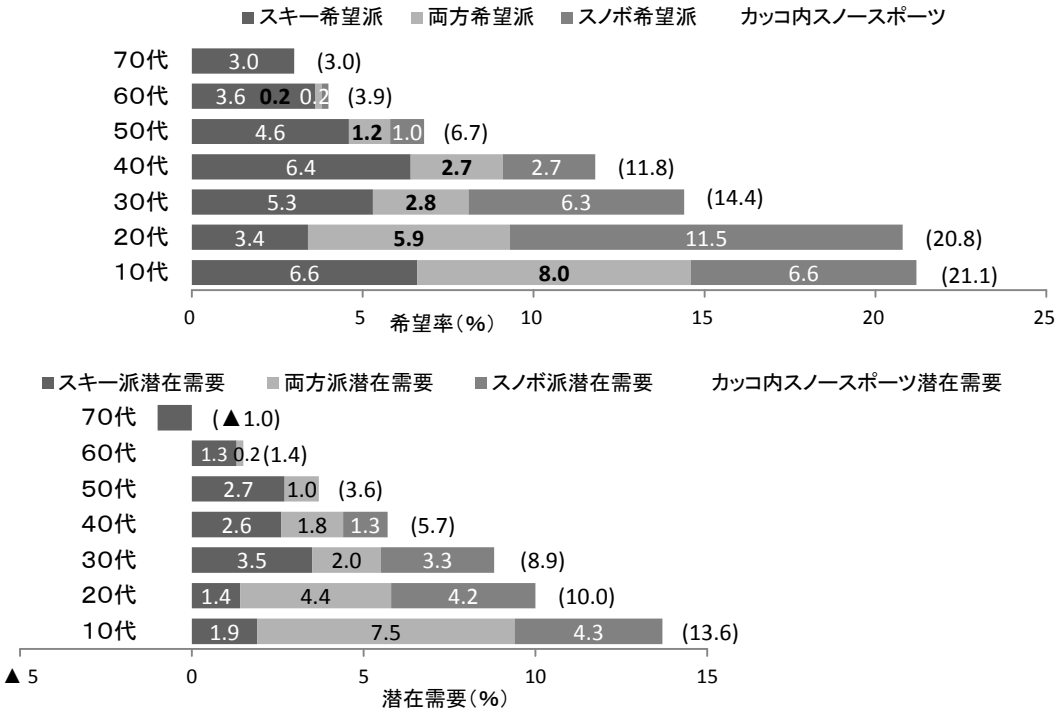
3.スノースポーツの年代別希望率と潜在需要

10 代はスキー、スノボ「両方希望派」が多数

「スノースポーツ」の希望率（将来やってみたい、あるいは今後も続けたいとする人の割合）は2016年には10.5%となった（図表3）。「スノーボード」だけ希望する割合（「スノボ希望派」）は2012年から大きな変化はないが、「スキー」だけ（「スキー希望派」）の希望率は2012年に比べて2.6ポイント低下した。両方（「両方希望派」）の希望率は2.4%で、「スノースポーツ」希望者の2割を占めた。

2016年について年代別にみると、10代は「両方希望派」の割合が8.0%で、どちらか一方だけ希望の割合を上回った（図表4）。10代は「スキー希望派」と「スノボ希望派」の割合は同数となり、20代と30代は「スノボ希望派」のほうが多く、40代以上は「スキー希望派」のほうが多かった。希望率から参加率を差し引いた値を潜在需要とすると、潜在需要は10代が最大で60代まではプラスだが、70代ではマイナスとなっている。「スノースポーツ」は若年層や中年層に潜在需要があり、今後「スキー」が回復するのか、「スノーボード」が一定以上を維持するのかが注目される。

図表 3　スノースポーツ希望率の推移



図表 4　スノースポーツの年代別希望率と潜在需要（希望率−参加率）（2016 年）